平城京薬師寺宝塔の建立(その1)

(薬師寺宝塔の研究 下)

正会員 宮 上 茂 隆*

緒 言

前稿「藤原京薬師寺宝塔の形態と平城京移建(薬師寺宝塔の研究 上)」(建築学会論文報告集 226)の主な結論は次のとおりである。(1) 藤原薬師寺塔の形態は、平城薬師寺の遺構である東塔と基本的には同一であった。ただし当初においては初重に違いがあり、後者が裳層まわりに壁扉を設けているのに対し、前者は裳層まわりを吹放ちとし、塔身側まわりを囲っていた。また前者の四天柱内には、後者にはない(現在あるのは後補)木製須弥壇が設けられていた。平城薬師寺塔では新たに巨大な釈迦八相成道の塑像群を安置するために広い内部空間が必要だったのである。(2) 平城薬師寺の創建にあたって旧都藤原京の薬師寺では東塔1基が解体された。そしてその塔身材は平城に運ばれて西塔塔身として組み立てられた。(3) 平城東塔の塔身は新材によって建てられた。

本稿では前稿の後半をうけて平城薬師寺の東西塔、なかんずく現存する東塔の建立事情を明らかにしようとするものである。塔身が新造であるという前記(3)の結論を重ねて確認することと、残る裳層部分に藤原薬師寺塔の旧材が果して使用されているかどうかを明らかにすること、の2点が主要な課題となる。前記(1)の結論に留意しつつ、今まで幾度か行ってきた東塔調査をふまえて、関係するとみられる建築的問題点の幾つかについて詳細な検討を加えたい。

1. 平城薬師寺東塔初重裳層

a) 裳層柱およびその礎石

初重の裳層柱は全部で20本、そのうち15本が当初材と認められ、残りは、その感じからして明治修理より以前、江戸時代修理の際の取替え材とみられる(図-2参照)。以下の文中で、裳層柱そして繫虹梁の位置は、この図における番号によって示す。当初材の柱は現在外側に面している側の風蝕が内側に比してずっと少ない。そして内側の面には劇しい風蝕の痕と、それをはつりとした痕跡とがみられるから、柱の内外面が入れ替えられていることは明らかで、それは柱に新材を補充したと同じ時期の仕事であろう。江戸時代には何度か修理が行われているが、郡山城主本多家の援助による正保年間の修

図-1 東塔現状断面図¹⁾

理の際と考えるのが妥当と思われる²⁾。ただし東北隅の22柱は当初から隅柱で内外面の入れ替えも行われていない。

ここでまず問題にしたいのは北面にある当初材の2本の柱、7柱と10柱である(図-3参照)。これらの柱だけは外側頂部に大きな埋木がある。それは形・大きさからみて、もと頭貫^{かしらぬき}が入っていた痕を埋めたものであることは明らかである。柱の内側の面には同じ位置に埋木がなへ、鋺頭金物を打ったとみられる釘穴だけがあるか

* 東京大学助手

(昭和50年10月1日日本稿受理・討論期限昭和52年1月末日)

図-2 平城薬師寺東塔現状実測平面図（足立康「薬師寺伽藍の研究」より。番号は新たに付け加えた。裳層柱のうち、1, 6, 12, 15, 16 が後補材）

ら、埋木部分に頭貫が入っていた時期に、これらの柱は隅に使われていたと考えられる。

以上の2本のうち7柱の方は、現在内側になっている面に激しい風蝕痕があるだけでなく、外側の面でも右角の部分には相当の風蝕を削り取ったと思われる痕があり、面の中央部と段差を生じているほどである。これに対し左角部の風蝕は僅かで、中央部ではさらに少ない。このような状態からみて7柱は、正保までは現在の内側面と西側面とを外部に向けた隅柱であったものを、その時点で現在位置に移動したと考えられる。

7柱の外側面には、頭貫の埋木の他にも、いくつかの埋木が見られる。現在各重裳層の四面は中央間を扉口とする他はすべて土壁になっているが、浅野清博士は、各重裳層に腰長押が廻っていること、二、三重では頭貫下面に方立様のものの痕跡があること、そして初重では、いま問題にしている7柱の外面の埋木などの痕跡を根拠に、当初は連子窓が入っていたであろうと推定しておられる。そこにおいて7柱外面の埋木は、腰長押直上のものが、方立および連子窓を嵌込んだ横材の痕、それより上方の柱面中央部にある2個の埋木は方立を柱にとりつけた太柄の痕と解釈されている。だが今度調査中に後者の埋木を取りはずして見る事ができたところでは、裏に約3.5cm角の穴の痕が認められ、それは壁下地の間渡し材の痕ともみられるので、すくなくとも初重裳層端間に関しては、連子であったかどうか疑問が残る。とはいえ、7柱外面の痕跡を柱間装置に係するものとみることには筆者としても異論はない。

一方10柱は、7柱と同じく元は隅柱であったのに、風蝕・埋木いずれの状態にも違いがあるのである。

10柱の内側は、側面だけに風蝕がのこり、正面は手

図-3 東塔初重裳層柱(10,7)の立面(斜線で示した部分は埋木)と平面(使われ方の変遷)

な斧ではつられているが元はそこにも激しい風蝕があったことは確かで、現に木目に添って縦に幾条もの溝がのこり、ことに下方ではそれが内部にまで侵透し裏側(現外側)にまで達している。これに対して現在外側に面している側では僅かの風蝕しか認められない。したがって現在内側を向いている面が長年にわたって外部に面し、それが内外面を入れ替えられた時点から、まだ短い歳月しか経っていないことになる。つまりこの10柱は、ずっと平の柱として使われ、正保になって他の当初柱と同じ

く内外面を入れ替えられたわけで、その時に隅から平に移された7柱とは経歴を異にすることになる。また、10柱がずっと平側の柱であったとなると、隅にあったのは、それより以前の、しかも短期間であったということにならざるを得ないが、その点は、外側面の風蝕の状態からも裏付けられる。すなわち、この柱が隅に立っていたとき、現在の外側面の左あるいは右の角部は、一方は風雨にさらされ、他の一方は内側の入隅であったはずであるが、現在見る風蝕は全体にほとんど一様であって、強いて比べれば左半部の方が若干風蝕が多いかと感じられる程度で、しかもその左半部の風蝕とて内側に比べれば、ごく僅かといってよい。ということは、隅柱であった期間は、平にあった期間に比べて、はるかに短かったということになる。

10 柱に関してもう一つ注目すべきは、それが隅柱として使用されていた期間に柱間装置が取り付けいていなかったとみられることである。7柱の腰長押上方にあるような埋木は10柱にはない。図-3に示したように柱全体としては頭貫より下方に3カ所の埋木がある。だが腰長押より下方にある大きな埋木は、内側（もとの外側）から侵透した風蝕を埋めたものであり、中段の埋木も、位置および形からみて柱間装置と関係するものとは考えられないだろう。その上方の円い埋木は、さいわい調査中に取りはずして中を見ることができたが、そこには斜め左方に向いた、ごく小さい釘穴らしきものがあつたにすぎない。

以上で明らかになったことは、10柱は平に移される前に短い年月ではあるが隅柱として使われていたこと、その間その部分の裳層柱間は開放吹放ちだったということである。ところが、前稿で明らかにしたように、平城薬師寺塔では始めから初重裳層周囲に柱間装置を設けるように計画されており、当初初重裳層柱間を吹放しにしていたのは藤原薬師寺塔の方であつたのである。そうなると10柱は最初藤原薬師寺塔の部材であつたということになる。柱間吹放ちの期間が短かつたという点も、藤原薬師寺の創建から平城薬師寺の創設までの間が30年ほどしかないということとよく対応する。つまり、10柱は藤原薬師寺塔の裳層隅柱であつたが、平城薬師寺に運ばれて裳層の平の柱として使われ、さらに江戸時代に内外面に入れ替えられて今日に至っているということになる。

10柱が藤原京の塔の旧材であつたとなると、他の当初材も旧材である可能性が強いであろう。7柱が藤原京にあつた当時隅柱であつたかどうかは不明とするほかないが、前述した柱間装置の為の仕口などは平城に移された後で造られたことになる。その柱間装置の当初の形式を推定することが難しいのは、旧材に二次的に作工を施してそれを設けたことに、その一因があるのではな

いかと思われる。

また、ある柱を短い年月だけ隅に使った後で平に移すということは新材の裳層では考えられないことであり、それじたい裳層の移建を想定することなしには理解し難いように思われる。では移建の際に何故隅柱を平に移したのであろう。理由は恐らく柱長さに関係があろう。

本薬師寺にのこっている当初の礎石は、いずれも正方形に近い柱座を造り出したもので、地覆座のある場合には、それを柱座と続けて同じ高さに造り出している。そして、凝灰岩床敷ののこっている平城の東塔塔身と金堂でみると、礎石は柱座が床面より僅か高くなるくらいに据えられている。地覆座のある礎石では、地覆材を水平に置く為にも礎石レベルはかように同一でなければならない。ところが、平城東塔の裳層柱礎は地覆座が造られているにもかかわらずおのおの高さが異なり、高いものは5寸ほども敷石面からとびだしているのである。その為地覆材（現在のものはすべて後の取替え材）を礎石の突出に合わせて欠いて使用している³⁾。それは矛盾しており不自然なやり方といわざるを得ない。どうしてもそうせざるを得ない事情があつたからに相違ないが、それは裳層柱が藤原薬師寺塔の旧材であり、それらの長さが既に一定ではなかつたことによるのではないかと思われる。藤原薬師寺では塔の初重裳層柱間は開放であつたから地覆はなく、したがって裳層柱礎のレベルの統一にこだわる必要がなかつた。しかも当寺の塔の造営は、東塔跡の礎石からみるかぎり拙速の疑いがあるから、各裳層柱礎のレベルに高低差があり、ために裳層柱長さに長短のむらがあつたということは十分ありうることであろう。そうした藤原薬師寺塔の裳層柱を平城東塔で使用するにあたり、前者の裳層柱礎のレベルを後者のそれとどのように調整したかは知るよしもないが、後者裳層柱礎高さの不揃いはその結果であろう。したがって藤原京で隅に使っていた柱を平に移したのは、意図的であつたかもしれないが⁴⁾、あるいは調整の不手際でそうせざるを得なくなつたということも考えられよう。

b) 屋根裏板と彩色板

東塔初重の内部は、塔身内が折上組入れ天井、裳層は化粧屋根裏になっており、いずれにも彩色画がある。天井の格間には4間に1花の単位で宝相華文が、支輪板には蓮と宝相華唐草文とが1枚に1枝ずつ交互に、描かれている。また裳層の屋根裏にも支輪と同じように蓮と宝相華が垂木間に1枝ずつ交互に描かれている。ただし後者の場合、化粧裏板にではなく、垂木間毎に1枚ずつ釘で打ち付けられた2分ほどの薄板に描かれているのである。そしてこの薄板に隠された化粧裏板の方には白塗地の痕跡が認められるのである。したがって彩色された薄板は二次的の仕事ということになるが、その文様の様式や、板の材質および風化の状態から、それらは建立当時

塔身天井 (上) と支輪 (下) (「奈良六大寺大観薬師寺」より)

裳層垂木間の彩色板 (筆者撮影)

図-4 東塔の彩色文様

のものと考えられている。

これらの彩色画は従来あまり重視されていないようである。ただ福山敏男博士が、それを国内および中国の例と詳細に比較検討して、初唐の、主として7世紀後半あたりの様式に従っているとすることができよう、という結論を出しておられる⁹⁾。しかしながら、この種の宝相華唐草には中国でも盛唐の時代にあっても初唐様式への復古主義的傑作もあるから、それを藤原薬師寺創立の頃か平城薬師寺創立の頃のいずれかに決定するのは困難である、として彩色画の様式年代と東塔の建立年代とを結びつけることには慎重を持しておられる。また裳層垂木間の彩色文様のある薄板については、「垂木間が、もと白土塗の仕上げであったのを物足らないとして落成の直前か直後に彩色した薄板を取付けたものとすれば云々」と推定しておられる。福山博士は東塔の移建説を支持しておられるので「落成」といっても本薬師寺におけるそれと、平城移建後のそれとがあるはずであるが、どちらを指しておられるのかは、この文からは明瞭でない。

この彩色板はもっと重視されるべきだと思う。というのは、この種のやり方は他に例のないものだからである。したがってそれは軽い思いつきで付加されたものとは思えない。

一般に化粧屋根裏は彩画を施さないのが原則だったはずである。裏板は本来、上に瓦葺の下地となる土が敷かれるものであるから彩画に適したところではない。また彩画は建築工事が一応終わったところで行われるのが普通であろうが、既に垂木間に打ち付けられてしまった裏板に絵を描くというのは容易ではなかろう。それに、彩

画による荘厳が必要な空間なら化粧屋根裏とせずに天井を設けるのが普通である。野屋根というものが成立して内部に面する垂木・裏板が事実上天井に近いものになった時代になっても、裏板に彩画を施す例がほとんどないのはその為といえよう。したがって東塔裳層が丸垂木である（その為に彩画板と垂木の間にすき間が生じている）にもかかわらず彩画板によって化粧屋根裏を装飾しているのは、裳層内を荘厳しなければならない新たな要請にもとづいて考え出された一つの解決策だったに違いないと思う。

では裳層屋根裏を荘厳する必要はどうして生じたのであろうか、と考えた時に想起されるのは、既に明らかにした藤原薬師寺塔と平城塔との初重における相違である。前者においては塔身側まわりに柱間装置があり裳層は吹放ちになっていた。したがってその裳層屋根裏板は当然単なる白土塗の仕上げだったはずである。一方平城の塔では、塔身内いっぱいになるような釈迦八相成道の塑像群像が新たに企画されたことから、裳層も内部空間としてとりこまれた。そこにおいて裳層の空間は、藤原の塔における四天柱外の空間（仏堂でいえば内陣柱の外側の庇）に相当するものになったのである。それに相応しい天井画による荘厳が必要になったはずである。

東塔初重裳層屋根裏板に白塗の痕があり、その上に彩画板がとり付けられているのは、まさに以上の事実に対応するものである。したがって初重裳層屋根裏板は、もともと藤原薬師寺塔の部材であったことになろう。

平等院鳳凰堂中堂には裳層が付属し、その三方は吹放しであるが、背面部だけは裳層柱間に壁を設けて裳層の

空間を堂内にとりこんでいる。中堂の殿身は3間×2間の母屋だけで、普通の仏堂にある庇の空間がないので、裳層でその分を補っているのである。そこで、吹放ち部分の屋根裏板はただの白土塗であるのに対して、堂内になった化粧屋根裏部分は、垂木のみならず裏板にまで、殿身部の天井に準じた華麗な彩色が施こされている（この垂木は角で、しかも細いから彩色するのはそれほど難しくなかっただろう）。これは平安後期であるから東塔よりかなり時代が降るとはいうものの、上に示した解釈の妥当性を傍証する格好の実例というべきであろう。

東塔より20年ほど遅れて造られた東大寺大仏殿は、東塔と同じように裳層を堂内空間の一部とする建築であったが、ここでは殿身全体に天井を設けて彩色したのにたいし、裳層には各間に一つずつ倒蓮華が取り付けられていた⁶⁾。また同じ造東大寺司によって建てられた法華寺浄土院金堂では倒蓮華が母屋の天井と庇とに取付けられていた⁷⁾。この倒蓮花というのは、東大寺法花堂内陣天井にあって現在天蓋と呼ばれているものに相当する⁸⁾。大仏殿の裳層、浄土院金堂の庇、いずれの場合も隅の間にだけは倒蓮花がなかったが、それは、そこが化粧屋根裏であったために、取り付けにくかったのであろう。化粧屋根裏部分を荘厳するものとして、東塔造営当時にこうした方法が知られていたなら、丸垂木の間に彩画板を打ち付けるといふ、どうみても体裁がよいとはいえないやり方を採らなかったのではないかと思われる。

東塔の彩色文様の様式については福山敏男博士の次の文があるが、本稿の結論はそれとも矛盾しない。

（唐草文様の）骨線が左右に波打つことは六朝の忍冬唐草（五世紀の敦煌石窟130洞の垂木間文様の例）以来の古い伝統をもつもので、法隆寺金堂の中の間と西の間の天蓋や橘夫人厨子の天蓋の支輪間の六朝風の蓮・忍冬唐草文、法隆寺金堂支輪間の初唐風の蓮華唐草文にも明瞭に伝わる。薬師寺東塔ではこの波動は支輪間文様第1種では明瞭であるが、第2種では枝が重なる関係もあってやや明瞭でなくなり、垂木間文様では一層不明瞭になって茎は直交する状態に近くなっている。盛唐の様式を示す唐招提寺金堂支輪間の宝相花文は唐草というよりも切枝というのが適当なくらい写実風になって六朝風な規則的な骨線の波動は全く忘れられている。

東塔の塔身は天平における新造と考えられるが、それにもかかわらず天井支輪間文様が初唐様に近いのは、藤原薬師寺塔のそれを模した結果であろう。いや、東塔の彩色をする頃には、既に本薬師寺東塔塔身を移建した西塔が建ち上っていたであろうから、直接の手本はその方であったかもしれない。

裳層垂木間の彩色板の方は、塔身天井支輪間の文様を模した可能性が強いと思われる。2種の唐草を交互に配

している点のみならず、花や葉の描き方まで似ているからである。平等院鳳凰堂中堂では、殿身天井支輪間は薬師寺東塔と同じく2種の唐草を各間に1枝ずつ交互に配しているが、背面部裳層垂木間は2間を1単位として菱襷文を描いている。薬師寺塔でも支輪間と垂木間とは、塔身天井と裳層屋根裏との違いがあり、画面の形も異なるのであるから、藤原薬師寺塔において、もしも垂木間に彩色を施していたのなら、その図案は支輪間とは違ったものになっていたに違いない。またその場合には平城でもそれに倣ったに相違ない。しかるに平城東塔においてそうっていないのである。垂木間の彩色板は平城において新たに付け加えたもので、その際支輪間の彩色を模して間に合わせたということが考えられるであろう。その唐草が支輪のものより直線的になったのは、画面がより細長いためと、福山博士が指摘された時代による様式的傾向の変化とによるものであろう。

以上の考察で、東塔初重の裳層柱に藤原薬師寺塔の旧材と認められるものが使用されていること、裳層屋根裏板も藤原薬師寺塔の旧材と考えられること、そして裳層柱礎は、藤原薬師寺塔の旧材の柱を立てることを前提に据えられたらしいこと、が明らかになったと思う。そうすれば東塔初重裳層は藤原薬師寺塔初重裳層の移建と認めて差し支えなからうが、次の章ではまた別の視点からこの結論を裏付ける証拠を示したい。

注

- 1) 塔身各重屋根の小屋裏にみられる太い横材は、明治修理の際に補強として入れた^{いんぎ}桧木。
- 2) 四柱間に設けられた木造須弥壇の框金具の銘によれば、それが造られたのは正保2・3年頃であったから、当初からあった釈迦八相成道の塑像群像は、その時に取払われたと考えられる。また、正保には屋根の垂木を2尺ずつ切縮めたという記録もある（次稿注参照）。
- 3) 次の文化年間の修理の「願書」に、初重の柱37本のうち16本を2、3尺切縮めて根継ぎをしたい旨記されているのは、現に塔身の柱（心柱を除く）16本のすべてが根継ぎされているのに相当するとみられるから、より傷みやすい裳層柱の取替え補修は、既に正保の修理のときに終っていたものと思われる。
- 4) しかも、地覆材と柱を繋ぐ仕口が造られていないで、地覆材は礎石上に単に置かれているだけのようである。円柱の場合なら地覆材を柱型に合わせて欠いて仕合わせるだけで地覆を固定することができるが、角材の場合には地覆との接合に仕口をつくる必要があるはずである。それが無いのは、柱間装置じたいが二次的に付け加えられたことを暗示しているように思われる。
- 5) 正保の修理の際に7柱を隅から平に移動したのは、三隅に新材を補充した為と考えられる。
- 6) 福山敏男・久野 健『薬師寺』（東大出版会）p. 173
- 7) 奥村秀雄「天平創建の東大寺大仏殿装飾についての一考察」（『大和文化研究』46）
- 8) 福山敏男「奈良朝末期に於ける某寺金堂の造営」（『建築学研究』55, 56）（『奈良時代における法華寺の造営』として『日本建築史の研究』に所収）
- 9) 飯田須賀斯「三月堂の『所謂天蓋』は天井の倒蓮華ならん」（『日本建築学会研究報告』22）

SYNOPSIS

U.D.C. 72.03:726.1(Y)

CONSIDERATIONS ON THE CONSTRUCTION OF THE PAGODAS OF THE YAKUSHIJI IN THE HEIJO CAPITAL (Part I)

Part II of the Study on the Pagodas of the Yakushiji in Nara

by SHIGETAKA MIYAKAMI, Assistant, Department of Architecture, University of Tokyo, Member of A.I.J.

The former conclusion* about the present east pagoda at Yakushiji is that the core of the pagoda is a new structure erected in the Heijo capital.

In this paper it is ascertained that at least the first story lean-to-roof of the extant pagoda was made from the old materials of the original pagoda in the Fujiwara capital. The main proof is that, one pillar and the roof boards of the lean-to-roof bear marks suggesting that those materials had once been used on the first story lean-to-roof unenclosed of the original Yakushiji pagoda.

* Shigetaka Miyakami, "The Pagoda of Yakushiji in the Fujiwara Capital: Its Form and Movement to the Heijo Capital", The Transactions of the Architectural Institute of Japan, December 1974, No. 226, pp. 73-83.